

◆2010年 12月  
今月の特選句

**遺伝子の組み換えならず運動会**

柳 紅生

我が子の鈍足は父方の遺伝。運動会の朝、原因不明の腹痛になるところまで似て、肩身が狭い。「遺伝子の組み換え」が脳裏を掠めた。

**靴下に指振り分ける暮の秋**

山本あかね

「足指の長さを平等に」の民主主義の履き違えの五本指靴下は、使う立場からすれば憂鬱である。憂鬱な季語「暮の秋」を生かした。

**砂時計途中止まらぬ年の暮**

氏家頼一

数へ日ともなれば、一分一秒が大切。時間よ止まれの思いである。砂時計の砂の落ちる速さにも似る、歳末の慌しさを素直に詠んで佳句。

**彼の猫の名前はまだか漱石忌**

有吉堅二

「名前はまだ無い」という冒頭の一節を上手く利用して賢い。貪欲になれば句にならぬものは無い。「働けば多少は楽に啄木忌」などと。

**老化てふ医者の一とこと日短**

高橋素子

存分待たされて三分の診察。「老化」という素人でもできる診断への怒りが、句の発想の動機。「日短」は「ひとこと」に呼応して抜群に上手い。

**思ひ出に虫喰ありぬ柿落葉**

百千草

「記憶のページ」には「欠落」がある。それを虫喰と感じたのが作者の感性。手にした柿落葉にも虫喰を見つけて、取り合わせたところが見事。

今月の秀逸句 七七をつけてみました

影なれど足長でいて秋の暮れ 久我正明

・・・短足ゆえに好きな季節か

ふんどしも衣装のひとつ炎暑かな 横山喜三郎

・・・透明衣装はふんどしはずし

年中がカミの留守なりわがつむり 前 九疑

・・・変換ミスの神の文字とも

味はともかく抱かれ上手のどてかぼちゃ 森岡香代子

・・・擬人化したねどてかぼちやまで

文化の日空気をよめと言はれけり 山本 賜

・・・空気は文字じゃないから読めぬ

鳥みむきしなかつただけ木守柿 前川敏夫

・・・それを言つちやおしまひだろう

律儀にも貧乏神の還りきし 永島董玉

・・・神を迎える酒も底つき

腰痛も歯痛も忘る林檎狩 田村米生

・・・終ればすぐに思ひ出すこと

権禰宜に不倫の噂神の留守 可知豊親

・・・手近な巫女にちよつかいを出し

携帯のふたり衝突年の暮

酒井鹿洋

・・・まさか自転車乗りじやあないね

適当に散らばつてゐる回栗よ

日根野聖子

・・・意識的より自然がよろし

七五三五七五で四九八九

森 要

・・・孫の慶事を爺が句に詠む

死んだふり板についてる子蠅螂

村上美和

・・・板の一字をうまく使った

愛犬を枕にケータイ文化の日	青山桂一
小六月なれど園には母子のみず	青山桂一
ことはらず紅葉かつ散る園の木々	青山桂一
不夜城を遠くにしたるちんちろりん	秋月裕子
秋ふかし夫のロマンは妻不満	秋月裕子
生きるとは触るる手ざわりもみづれる	秋月裕子
身に入むや長寿国とて帳簿面	麻生やよひ
大見得のせりふ訛るや村芝居	麻生やよひ
真夜中も目を明け沈思する案山子	麻生やよひ
わたくしを誘い出す気か虎落笛	足立淑子
煤逃げは他界への路だと思ふ	足立淑子
落書きを真面目に読んでクリスマス	足立淑子
韓流のドラマのとりこ潤目焼く	有富洋二
体調の万全にして日向ぼこ	有富洋二
煮大根の千里を走る匂ひかな	有富洋二
その日から無精となりぬ初炬燵	有吉堅二
独り者のまた一人来る日向ぼこ	有吉堅二
一日のみ諸人こぞりてクリスチャン	安藤淑子
濡れ落葉掃除する人濡れ落葉	安藤淑子
柿一つ鳥も啄かず残りたり	安藤淑子
母方の母が張り切る七五三	飯塚ひろし
頬被り知らぬ存ぜぬ通しけり	飯塚ひろし
念入りに脚と大根洗ひけり	飯塚ひろし
七つ八つ赤い柿の実枝しなり	井口寿々子
秋刀魚焼く煙目にしむ厨かな	井口寿々子

ルンバという掃除機踊る秋日和	井口寿々子
鳴く虫も鳴かない虫も闇の中	井口夏子
混沌を占ふように紅葉散る	井口夏子
指差して渡り鳥の消えるまで	井口夏子
雀追わぬ案山子は街の道化なり	池田亮二
蟋蟀の最終楽章ピアノニッモ	池田亮二
迷惑をかけますと台風こちら向く	石川節子
日短に年の短さ加わりぬ	石川節子
秋天や息子に欲しいドラ1 トリオ	石川節子
ハロウィンの意味も知らずに被り物	伊藤浩睦
無花果や思えば通じの遠くして	伊藤浩睦
ちゃらと鳴るアルミ具足の秋祭	伊藤浩睦
鳥渡る人近付けぬ鳥ありて	稲沢進一
将来を憂ふ日本の案山子かな	稲沢進一
極月やインターホンを三度押す	稲沢進一
松茸や宝探しの山歩き	井野ひろみ
無住寺やきのこそここ踏みそうに	井野ひろみ
秋時雨濡れし小鹿の草食みて	井野ひろみ
神の留守裏切りものの横行し	今城夏枝
冬温し思ひ出を消す消しゴムを	今城夏枝
登りきり何処へゆくやら烏瓜	今城夏枝
穴感ひ車部屋秘書顧問なる	宇井偉郎
おはじきをして雌ばかり無精卵（かんたまご）	宇井偉郎
いつまでも河豚で釣る癖改めよ	宇井偉郎
話声次第に消えて芒原	宇佐美徹郎
大道に見えぬ大壁秋の芸	宇佐美徹郎
困惑の連続くさめは親譲り	宇佐美徹郎
綿虫に脳味噌の中見られけり	氏家頼一
砂時計途中止らぬ年の暮	氏家頼一
師走かな松坂町は吉良屋敷	氏家頼一
高笑ひしては虚の神無月	越前春生
マドンナの余生は如何に木の葉髪	越前春生
借金の無きが幸せ木の葉髪	越前春生
昼は魔女夜は聖母として生きる	岡部一兆
歳末のエレベーターや子供飲む	岡部一兆
運動会他人の孫と比べるな	岡部一兆
天高しカーブミラーの瘦身像	奥脇弘久
恋一字戀と直して秋深む	奥脇弘久
柚子釜に加齢の悩み閉ぢ込めて	奥脇弘久
足元に注意とあけび高笑ひ	笠 政人
腰まげて運動会の児と踊る	笠 政人
傾きし案山子の肩を踏む鴉	笠 政人

初時雨傘に入れと大女	可知豊親
帰り来て熊手飾らずそれで履く	可知豊親
実りけり鶴飛来するてふ田	加藤澄子
跳ねる鯨よ霧氷の天狗嶽	加藤澄子
坂の上に平和はあらず白息吐く	加藤澄子
心外なお迎へ黒子破蓮	加藤 賢
コスモスや風下に坐す喫煙者	加藤 賢
実を生さぬ木はことに美し柿紅葉	加藤 賢
沖縄が地にしがみつく大台風	金澤 健
寝酒過ぎ魍魎魍魎をよるこばす	金澤 健
おじやにて差配終へけり鍋奉行	金澤 健
新品の財布に納む柿落葉	川島智子
渋柿も焼酎に酔ひ甘くなり	川島智子
まだ明日を信じ球根植ゑてをり	川島智子
わたくしの前に出でにし居待月	北村マコ
秋祭り大口の獅子子ら泣かす	北村マコ
掛稲に降る雨せめて優しけれ	北村マコ
風上に欲深き人金木犀	久我正明
寒村を色町にする金木犀	久我正明
畦を焼く狐の提灯曼殊沙華	工藤泰子
ほゝけたる芒の花の軽さかな	工藤泰子
本物の金木犀の匂ひけり	工藤泰子
朝霧の重さに喘ぐキハ一輛	倉方 稔
躰起しおぢけづく猫膝へ来る	倉方 稔
寒波来て貌しかめたる鬼瓦	倉方 稔
頻尿に眠るひまなき夜長かな	黒澤正行
卑猥さの瓜二つなる大根かな	黒澤正行
触るる肌白くやわらか曲り葱	黒澤正行
女知事「つや姫」の名で新米を売る	黒田忠一
本殿の座布団洗ふ神の留守	黒田忠一
ムキになり慌てて投句無季だった	黒田忠一
ラーメンか古書にするかと文化の日	小杉 隆
隠し子のからまる地下や落花生	小杉 隆
冬麗の百八矢なる弦音かな	小杉 隆
品物は保障しますよ秋の風	小林英昭
頻尿のわれにちんちん鉦叩	小林英昭
しげしげと便器を覗く文化の日	小林英昭
米不作ドングリ不作でクマがでる	齋藤八兵衛
猛暑日に熱帯魚だけは元気です	齋藤八兵衛
第三の男第三のビール好き	齋藤八兵衛
ななかまどなど不必要電機釜	酒井鹿洋
切り刻むニューファッションの娘の水着	酒井鹿洋

口達者方言出で来秋の昼	桜井宇久夫
新居初夜夜寒に寝たる縦半畳	桜井宇久夫
病人が病人見舞ふ暮の秋	桜井宇久夫
転失気の音も床しきおこたの娘	佐藤古城
わっはっは中にオホホも暮の句座	佐藤古城
芋鍋を囲み毛脛と御居処かな	佐藤古城
猫飼えず猫毛ジュータン敷きつめる	佐藤義子
紅葉映え笑いじわ残し友帰る	佐藤義子
不美人よ訳あり野菜食べて良し	佐藤義子
明日なろう今日は幾片この葉舞ふ	澤田蔦恵
口づさむ歌の名忘れ暮の秋	澤田蔦恵
稲掛や慣れぬ手付きの若夫婦	澤田蔦恵
シベリヤを丸裸した偏西風	柴田真一
金くれと老樹すり寄る秋の雲	柴田真一
月見んと岩風呂覗く女好き	柴田真一
諍ひの黙に分け入る虫の声	清水吞舟
我が家にも小さき歴史や文化の日	清水吞舟
我等みな飢えし世代や芋煮会	清水吞舟
清白や稚児呼びかけに春まねき	首藤虎男
小判鮫通貨出きぬよ骨董屋	首藤虎男
かつがれて一日たてり四月馬鹿	首藤虎男
引っこ抜く地球の芯や大牛蒡	壽命秀次
秋天や口吸ふ妙にハーモニカ	壽命秀次
食の秋ウエストは変身腹回り	壽命秀次
後ろから覗いてみたき菊人形	白井道義
ハンサムな医者にどぎまぎうすら寒	白井道義
傍らに猫の正座や秋刀魚焼く	白井道義
地デジ見るアナログ男文化の日	高田敏男
北海道三平汁で済みません	高田敏男
退職や小遣目減り冬眠す	高田敏男
コンパスに突かれて醒めし夜学の子	高田菲路
万金の河豚を足蹴に選り分けし	高田菲路
傍目には怪しき河豚のふくろ糶	高田菲路
冬支度衝動買ひの腹巻きも	高橋マキコ
夜長かな「人間失格」読み切って	高橋マキコ
夜食買ふカロリー表示に迷ひつつ	高橋マキコ
新走りまわりは皆な下戸ばかり	高橋 都
濁り酒ひそかに造る話など	高橋 都
参道を下るドレミファ木の実落つ	高橋素子
特大の大的字となり旅寝なり	高橋素子
どら焼きの失敗作なり十三夜	高松雄三
泡飛ばし背丈を競ふイエロハット	高松雄三
里芋や萎れた茎に隠れある	高松雄三

港に一人神のこり神無月	田中章子
ハネムーンのおんぶばったのお元気で	田中章子
杜の奥笑ひこゑある神無月	田中章子
秋晴の日差し細胞若返る	田中 勇
まあなんといふ美しき山粧ふ	田中 勇
晩秋の柱時計の鳴りにけり	田中 勇
路地裏の猫の案内冬日向	谷むつみ
風来れば風と遊ばむ烏瓜	谷むつみ
無骨なる慣れぬ手つきの初点前	谷むつみ
値が下がりようやく口に秋刀魚かな	種谷良二
隣の鍋気になつてゐる芋煮会	種谷良二
狩る人を待ち構えへたる毒茸	種谷良二
親も子も衣装くらべの七五三	田村米生
犬馬鹿の犬と揃ひのちゃんちゃんこ	田村米生
毛脛のやうな掘りたての長芋は	中岡久美子
靴先に音遊ばせて落葉踏む	中岡久美子
風の日は松茸匂ひ高値札	中岡久美子
励まされ亦励まざる木の葉髪	永島董玉
耳寄りの儲け話に笛鳴きて	永島董玉
新米を研ぐ新米のすし職人	西をさむ
ふた駅を無賃乗車の牛膝	西をさむ
赤とんぼカーブミラーにぶつかれり	西をさむ
止まり木となりたる案山子捨てらるる	原田 曄
皆揃ふまでに一献今年酒	原田 曄
焼芋食ぶそこらじゅうの鳩遠巻きに	原田 曄
正客のために乱れて萩の花	ひがし愛
もてなしの仕上げに利かす鷹の爪	ひがし愛
美男蔓男だてらに化粧して	ひがし愛
毒といふ美人と茸の共通点	彦阪義久
エレベーター開けば外は秋だった	彦阪義久
月を観て地球も丸いと文化の日	彦阪義久
山男見送つてゐる月夜茸	久松久子
ぬつと出てどすんと殺られ熊の子	久松久子
すつぴんをマスクで隠し梅田まで	久松久子
仏壇に愚痴をこぼせば秋深む	日根野聖子
気の乗らぬ出勤もあり秋の蜂	日根野聖子
百点の算数理科や運動会	藤岡蒼樹
子が抜いて根を篩ひたり未枯るる	藤岡蒼樹
足許の青銅銅貨夕時雨	藤岡蒼樹
野分晴木犀の香の満ち満ちて	藤原セツ子
月の舟浮かんで揺るる水たまり	藤原セツ子
懐かしの花野は遠し車椅子	藤原セツ子

秋深むしてあなかつた忘れもの	藤森荘吉
エレベーター紅葉ひと葉も乗ってくる	藤森荘吉
森をみて木をみて森をみて紅葉	藤森荘吉
紅葉前線遮断機降りしままなりき	坊野念寿
孤独とは斯くあるべしと蜘蛛の糸	坊野念寿
濡れ衣は泡立つままに泡立草	坊野念寿
着ぶくれてどこかに切符まぎれ込む	前川敏夫
まだ蒼ばかりの老女菊人形	前川敏夫
小春とは女房の名よと苦吟せり	前 九疑
鋤焼きは好きやと言へり西の女	前 九疑
手を抓りお悪戯は駄目と炬燵かな	松尾軍治
医者の手のあたたかきこと冬来る	松尾軍治
冬の雨ひたすら本を枕かな	松尾軍治
恨みたるかの陽の恋し今朝の秋	丸山紘一
天高し地底地上もドラマ燃ゆ	丸山紘一
誤逮捕でワル攻勢の秋の陣	丸山紘一
落葉して鴉の栖家除幕式	三塚不二
冬晴の宙きつね色唐松色	三塚不二
鯛焼のあんこ色々世の映り	三塚不二
仲悪し隣家と結ぶ蜘蛛の糸	三橋真砂子
翳雲見上げてるやら見られをる	三橋真砂子
風乗せて黄金田走る一輛車	三橋真砂子
秋潮を手で押し返すフラダンス	村上美和
大西日背負いサーファー現わるる	村上美和
我子の名やつと出てくる冬の月	百千草
パスワードあれこれ試す寒夜かな	百千草
三畳一間の恋か曼殊沙華	森岡香代子
松茸の気配を沈めどびん蒸し	森岡香代子
空の旅晴層圏で神探す	森 要
日中口秋の島々怨談化	森 要
思ひ切り熟れた石榴の大笑ひ	守屋八郎
無花果の種を呑んだと騒ぐ婆	守屋八郎
運動会跋扈してゐる女親	守屋八郎
王さんの打法を真似し案山子かな	八木 健
毛糸編む耳は話の輪に入れて	八木 健
トタン屋根だけに木の実は降るらしく	八木 健
レントゲン写真のやうに鮫鯨吊る	柳 紅生
長き夜のパソコンだだを捏ねてをる	柳 紅生
認痴でも負けまい力む柿の皮	柳澤京子
度肝抜く「うがい薬」と熱爛二本	柳澤京子
単語帳広げし窓のポインセチア	柳澤京子
初霜や今朝も十種の薬のみ	山内重昭



また一つ病が増えて神無月	山内重昭
ピカピカに磨きて車蔵ひけり	山内重昭
ペン先の耳付き走る夜長かな	山下正純
新涼の朝一人居り人は居ず	山下正純
乳すする我子や今宵は夜学生	山下正純
余りにも菊人形は美男美女	山本あかね
闇鍋や煮え立つものの怖ろしく	山本あかね
毒茸小雨が好きですくすくすく	山本けい子
葉と花が出逢ひ今年の曼殊沙華	山本けい子
新語流行語飛び交ふラジオ秋高し	山本けい子
柚子湯出て髪梳く時は女なり	山本 賜
昼顔やラーメンの屋台には鍵	山本 賜
秋田小町見事に孕み秋暑し	横山喜三郎
聴力のその都度かはる生身魂	横山喜三郎
スケーターたまに転ぶもご愛嬌	渡辺さだを
碧い瞳も羽織袴や七五三	渡辺さだを
里歩く熊冬眠を忘れしや	渡辺さだを